戦国武将の茶の湯と仏教

The Tea Ceremony and Buddhism of the Warlords

中村　修也*

Syuya NAKAMURA

要旨　侘茶の祖といわれる珠光には茶の記事が実在しない。そして、珠光―紹鷗―利休という流れは意図的に作られたもので、歴史的なものではない。これらは元禄期に作られたと考えられる。また、武士の一番の問題は他者を殺すということで、これは多大なストレスを生んだ。このストレスを解消するために茶の湯が武士の間で用いられた。茶の湯は平時だけでなく戦時においても行われた。そして日常に戻る際に茶の湯という装置が必用であった。

キーワード　わび茶　平常心　慰み　癒す

茶の湯と町衆

戦国時代の茶の湯というと、すぐに思い浮かべるのは千利休をはじめとする堺の町衆たちである。実際に茶の湯の史料として有名なのは四大茶会記と称される『天王寺屋会記』『今井宗久茶湯日記書抜』『松屋会記』『宗湛日記』である。これらの記主は、それぞれ天王寺屋一族、今井宗久といった堺衆と、奈良の塗師・松屋一族、博多商人とされる神屋宗湛など、すべて町人である。江戸初期になると、細川三斎・古田織部・小堀遠州・上田宗箇といった武家も茶書を残し始めるが、やはり利休たち町衆の印象は鮮烈である。もっとも、現在は、四大茶会記のうちで、信用できるのは『天王寺屋会記』のみという評価もある。

その原因の一つは、四大茶会記の内、自筆本に近い存在が『天王寺屋会記』のみであるからである。他の三つの茶会記は、後世の写本が元となっていて、『松屋会記』などは創作の可能性もある。(1) さらに、この時代の史料として、美意識としての「わび茶」と称されるものが、「珠光―武野紹鷗―千利休」という三代にわたる僧侶・町人によって完成されたという思想が加えられているものもあるからである。

しかし、この「わび茶」が珠光から利休に伝えられたという考えは、藪内流の家元・藪内竹心が元禄期に著した『源流茶話』に記されたものである。その内容が、いつの間にか普及したものであって、実証性のないものである。『源流茶話』には次のように記されている。

* なかむら　しゅうや　文教大学教育学部学校教育課程社会専修

一茶湯の濫觴ハ、後土御門院文明の比、南都称名寺之邊、珠光として閑人有り、酬恩院一休和尚ニ参禅して、教外の旨を悟リ、圓悟禅師之墨蹟を法信ニ賜りしを、丈室ニ掛て、香華を供し、炉裏に湯を煮て、同好之友（引拙・宗悟・宗陳之徒）を招きて、茶談の交りを結べり、其交り、興を塵外によすれ共、禮にして和し、和すれども禮を失ハす、おのつからにして法をなせり、時に慈照院義政公、其風流を聞し召れ、珠光を召て、茶道を御尋有に、清浄禮和之趣を申上られけれは、甚タ御心にかなひ、此道國家に流布せは、世法のたすけとも成べしと御感心有り、能阿弥・藝阿弥・相阿弥之徒に仰て、古實を考へ、真行台子之法、茶具の品々を御撰有しより、貴人の御翫とも成て、諸国に流布し、次て大内家・今川家・織田家、別而豊臣秀吉公に至り、利休に仰て、古法の過不及を御改正有しより、作法宜（ヨロシキ）にかなひ、上ミ公より工商にいたるまで、流布申事ニ候、

とあり、茶の湯の濫觴を南都称名寺の珠光に求めている。足利義政が珠光を召し寄せ、茶の湯を楽しんだという話である。もちろん珠光を茶の湯の祖とする考えは、早くは『山上宗二記』に見いだせる。『山上宗二記』もまた、堺の町人・山上宗二によって記されたものであり、その冒頭部分の、足利義政・能阿弥・珠光の三人が登場する逸話が珠光茶祖伝説である。「珠光之一紙目録」と称される一文がそれである。そこには、

夫御茶之湯之起者、普光院殿、鹿薗院殿之御代ヨリ御唐物同ク御絵讃等歴々集畢ヌ、（中略）其後東山慈照院殿御代ニ悉御名物寄給畢ヌ、（中略）御身ハ東山ニ有御隠遁四季共ニ昼夜之御遊興太タ不斜、（中略）昔ヨリ有来遊者早事モ尽キヌ、漸冬近シ、雪之山ヲ分テ鷹狩モ御年行ニ随テ御退屈也、何カ可有珎敷御遊カナト御諚之節、能阿弥謹而致得心首ヲ下ル、有良暫其憚不顧申上候、サレハ楽道之上者御茶湯ト申事御座候、南都皇明寺ニ珠光ト申者此御茶湯ニ卅ケ年抛身上一道ニ志シ深キ者ニテ候、（中略）公方様在御感即珠光ヲ被召上、師匠ト被定置御一世之御楽ハ此一興也、其比天下ニ御茶湯不仕者ハ人非仁ニ等シ、諸大名ハ不及申下々洛中洛外南都堺悉町人以下迄御茶湯ヲ望ム、

とあり、珠光が東山に隠遁した足利義政に能阿弥を通じて見出され、茶の湯が京内外に広まった様子が描かれている。『山上宗二記』は早くは天正十六年（一五八八）に書かれている。これは個人への茶の湯伝書と考えられている。もし、そうであるならば、一般への普及は考え難い。だが、『山上宗二記』の「珠光之一紙目録」と『源流茶話』の説くところは非常に類似性がある。藪内竹心が秘かに『山上宗二記』を見たか、あるいは足利義政と珠光の結びつきは広く人口に膾炙した話だったのかもしれない。

しかし、『山上宗二記』にはまだ、珠光・紹鷗・利休の三者の明確な位置づけはなかった。ところが、『源流茶話』になると、

珠光を茶祖とし、紹鷗を中興とし、利休を大成之法祖とあふぎ申事ニ候、

と、明確な位置づけがなされている。竹心が、こうした位置づけをした元禄時代には、織部流、遠州流などの武家茶が隆盛しており、竹心としては、町人利休を茶の大成者とすることで、茶の湯の源流は、町人茶にあることを強調したかったという側面があろう。

つまり、「珠光―紹鷗―利休」という三代の流れは、意図的に作られたものなのである。

そもそも、紹鷗は、珠光が没した文亀二年（一五〇二）の生まれであり、珠光から茶の湯の手ほどきを受けることはなかった。また、利

休にしても、その師を紹鷗としてよいかどうかは、まったく確証がない。紹鷗を利休の師とする根拠は、これまた元禄三年（一六九〇）以降に成立したとされる『南方録』「覚書」三の記載である。そこには、

宗易の物がたりに、珠光の弟子、宗陳・宗悟と云人あり。紹鷗はこの二人に茶湯稽古修業ありしなり。宗易の師匠は紹鷗一人にてはなし。能阿弥の小性（姓）に右京と云しもの、壮年の時、能阿弥に茶の指南を得たりしが、後は世をすて人になりて堺に居住し、空海と申けるに、同所に道陳とて隠者あり。常々心安くかたりて、茶道を委く道陳に伝授ありしとなり。また道陳と紹鷗、別して間よかりければ、互に茶の吟味どもありしなり。宗易は与四郎とて十七歳の時より、専茶をこのみ、かの道陳にけいこせらる。道陳の引合にて紹鷗の弟子になられしなり。

とあり、いかに千利休に茶の湯が伝えられたかを記している。この『南方録』の説をかんたんに系譜だてると、

珠光―宗陳・宗悟―紹鷗―――利休
能阿弥―右京（空海）―道陳―利休

となり、利休は足利将軍家の茶の湯を道陳から、珠光のわび茶を紹鷗から学び、両者を融合させた人物として描かれている。しかし、これは、あくまで元禄期の茶書の一説にすぎない。これを実証する同時代的な史料は皆無といってよい状況である。

そもそも珠光が茶人であったかどうか疑問である。[2] 珠光の茶会の記録は存在しないし、同時代の奈良の土豪・古市家の喫茶を記した『経覚私要鈔』にも珠光の記録は見えないのである。最近では利休の茶の湯の師は紹鷗の弟子の辻玄哉ではないかという説も登場している。[3]

その問題にはここでは深入りしないが、『南方録』の描いている茶の湯の根源も、やはり町人世界の出来事である。そこにはまったく武士は登場していない。これは、かなり意図的な記述と言わざるをえない。なぜなら、『君台観左右帳記』（文明八年・一四七六奥書）や『御飾書』（大永三年・一五二三奥書）といった茶道具を含めた諸道具の室礼を定めた書物は、そもそもが室町将軍家のため、ひいては武家のために書かれたものだからである。また、紹鷗や利休の時代に、唐物の名物として珍重される東山殿御物は、足利義政を中心とした将軍家の収集物である。

つまり江戸時代には最も正式な茶として意識される書院・台子の茶は、これら室礼・名物道具の点から考えて、室町将軍家から始まり、それは室町武士たちに広まり、町人世界にも普及したと考えるのが自然である。しかし、喫茶ということでいえば、どちらが早いかはかんたんに結論できない。

喫茶そのものは、早くから存在している。すくなくとも平安時代には、貴族と寺院において、一定の需要があり、鎌倉時代後期になると武家・庶民にも親しまれるようになる。室町時代には、茶業の発展とともに、喫茶も広がり、一服一銭などの廉価な路上茶も出現した。[4]

たしかに堺が、応仁の乱で衰微した兵庫に代わって、日明貿易で栄え、唐物も多く扱うことができるようになった。しかし、日明貿易は一五二三年の寧波の乱で実質的に終焉したため、[5] 堺の繁栄もそれほど長いものではなかった。それゆえ、茶の湯の隆盛を、堺中心、町衆中心で考えてきたのは、利休のイメージによる影響が大であって、実体とは乖離した面があるといえよう。

武士と茶の湯

戦国時代の武家茶の研究としては、米原正義氏の大部な研究がある。

米原氏の研究によれば、越前朝倉氏・能登畠山氏・出雲尼子氏・周

防大内氏・豊後大友氏・駿河今川氏・相模小田原氏・奥羽伊達氏といった全国の戦国大名において茶の湯文化を見出すことができる。[6] ことに、大内氏の茶の湯に関しては、「大内義隆記」を史料として検討を加えている。しかし、最近の『山口県史』では、「大内義隆記」よりも、次の「多々良盛衰記」（国立公文書館内閣文庫蔵）を取り上げており、こちらのほうが、記載内容が豊富である。ここでは「多々良盛衰記」の記述を取り上げることにする。

天文元年（一五三二）霜月十五日道麒（陶）ハ渡海仕リ、赤間関（豊浦郡）ヲ打過テ肥前国ニ乱入シ、龍造寺カ向ノ山ニ対陳スレハ、龍造寺甲ヲヌイテ降参ス、大寄少弐（宗）ノ一族ハ朝敵ニテ候ヘハ、国ヲ失ホロホシテ、同（天文）三年十月ニ歓ノ旗ヲ揚、屋形ハ長府ヲ御開陳、道麒（陶）ハ明ル二月ニ、殿イシテ、関ノ渡ヲ帰レハ国モ収リテ、山口ノヨロコヒ、我先草ノ殿作、三ツ葉四ツ葉ニ咲ク花ヲ柱花瓶ニイケヲキテ、茶ノ湯座敷ハ四畳半・三畳敷ノ次之間ヲ作ラヌ人ハ無リケリ、天下ニカクレナキ物、茶碗・茶壺ヤ天目ヲ、京・堺ニテ尋ツ、、松本茶碗ト天目ノ七ツ台ノヘラカツキ、新タムマシニナスヒノ摺リ茶壺、掛尽ハ夜雨ニ水コホシ合子、何モ十万疋道具ヲハ相良ソ求メ置ニケル、其外スキ衆ノ求トル所々ノ茶道具、カタ田舎山畑ノヲホヂヤウバノタシナメル磨鑵子ノ古キヲハ、トラレン者コソナカリケル、

これは、天文四年（一五三五）二月に、陶隆房が筑前・肥前を平定して、赤間関を渡って山口に凱旋した時の様子を描いたものである。いささか大げさな表現であるが、家臣たちの多くは、四畳半・三畳敷の草庵茶室を競って造作したようである。それだけではなく、名物道具を求めて、京都・堺に人をやって求め探させたとある。松本茶碗や七つ台、茄子の茶壺などの具体的な道具名まで登場し、「何モ十万疋道具ヲハ相良ソ求メ置ニケル」という有様であったとある。

この史料によると、草庵茶室の建造、名物道具の探究以外にも、数奇者が好む「わび」た道具を求めて、田舎の山中にまで分け入り、老人たちが使用している磨き鑵子の古ぼけたものまで求めていったと記されている。いささか揶揄的ではあるが、それだけにいっそうリアリティを感じる。

そして、この「多々良盛衰記」の記載と同様の状況が、豊後国においても見いだせることを傍証するのが、次の「一五八五年（天正十三）八月二十日付、長崎発、パードレ・ルイス・フロイスより耶蘇会総長に送りたるもの」という史料[7]である。

フランシスコ王（大伴宗麟、義鎮）は、数年前四ヶ国が謀反し、其子なる世子（大友義統）に服従を拒んだ為め貧窮し、日本に於て甚だ珍重する道具を売らんとして之を堺の市に送った。此道具は土を以て製した柘榴に似た形の小さな器に薬をかけたもので、一種の葉を挽いて粉にしたものを入れるのである。羽柴筑前殿（豊臣秀吉）Faziba Chicugendonoは日本の最良なる地の大部分を領する人であるが、此宝物Diamanteの事を聞き、日本に於て甚だ有名な器である為め、手に入れんことを望み、一万五千クルサド〈一クルサドは十匁〉を与へ、又更に好意を示す為め、此金を陸路山口の国を経、豊後に到るまで甚だ遠き所を運ばせた。（後略）。

ここには、豊後の大友宗麟が蒐集した茶道具を、豊臣秀吉が買い集めた様子が描かれている。さかのぼって考えれば、豊後の太守である宗麟も、以前にこれらの茶道具を買い集めたということである。

また、関東では、各地の山城から茶道具が発掘されることが報告されている。

たとえば、関東管領・上杉氏の出城の各所から茶道具が発掘されていることは、埼玉県立歴史資料館によって報告されており[8]、河越館跡からは、古瀬戸の茶壺、茶入、青磁花瓶、合子、香炉、天目茶碗などが発掘されていることも報告されている[9]。さらに、齋藤慎一氏によれば、佐野氏の居城・下野国唐沢山城からは茶臼が出土し、千葉県富津市にある真里氏が築城した金谷城からは、瀬戸美濃系の天目茶碗が出土しているとのことである[10]。

こうした茶道具を出土している山城は、平時の時のものではない。いざ戦闘態勢に入った際に、そこに立て籠もり、敵から防戦するための拠点であった。そうした非日常（戦闘）が行われる空間に、茶の湯を行うのに必要な茶道具を備えているということは、戦時においてすら、武士は茶の湯を行いたかったと考えられる。

つまり、武士にとって、平和な平地で行うことだけが「茶の湯」であったわけではない。戦時の、命のやり取りを行う場ですら、茶の湯をたてたくなるくらいのなんらかの刺激があったと考えるべきであろう。それを文字史料から追いかけることには限界があるかもしれない。武士たちの戦地における精神世界の問題になるからである。

戦地において戦闘者が必要なものはなにか。

それは平常心ではなかろうか。

戦闘においては敵をなぎ倒す精神の高揚が必要であり、冷酷な判断を実行させる骨太の精神が必要であったことはまちがいない。しかし、同時に、戦闘の行方を見据える冷静な判断が要求される。一兵卒ならば別だが、軍を率いる将たちは平常心を保ち、作戦を展開させなければならない。そうした時、仮設であっても茶室に入り、一服のお茶をいただく、そうした行為を経ることで、「市中の隠」ならぬ、「戦場の隠」を得ることを求めたのではなかろうか。

後に秀吉が名護屋城に黄金茶室を持ち込んだのは、秀吉の余裕のなせる技だったのかもしれないが、そこにも戦場における茶室、あるいは戦場の茶のあり方の流れを汲んでいたのかもしれない。秀吉は小田原征伐の際にも千利休を伴っている。これも秀吉のパフォーマンスのように受け取れなくもないが、実は、これも戦場の習いだったのかもしれない。その戦場の習いを秀吉が、より派手やかに行ったために、目立っただけと考えることもできなくはない。

たとえば島津家中で佐渡原の城主であった上井覚兼の日記には、さまざまな茶の湯が描かれている。

まず『上井覚兼日記』の中には、一日の内で、茶の湯が単独で行われるのではなく、諸事・闘争と共に存在する様子が窺える。その中でも、終日、茶の湯を楽しんでいる記事がしばしば登場するので、一部分だけであるが、引き出して記述してみると、次のようになる。

天正一〇年一一月一二日　終日乱舞又ハ御茶湯、種々御閑談也、
　　一二月一一日　夜深まで御酒・御茶なとにて御閑談也、
天正一一年　一月二九日　茶湯にて終日閑談申候也、
　　閏一月一〇日　終日茶湯にて、碁・将碁なと候、種々閑談也、
　　閏一月一一日　終日御酒也、御茶湯なとにて雑話也、
　　二月一四日　此日も、終日茶湯なとにて雑談共申候也、
　　二月一六日　終日酒宴にて候、御茶湯なとも候て雑話共也、

こうした茶の湯のありかたは、相当、上井覚兼の生活の中に茶の湯が定着していないと起こり得ない現象である。面白いのは酒宴と茶の湯が同居していることである。これは上井覚兼の日記においては一般的にみられる現象である。では、覚兼の茶の湯においては、酒宴と茶の湯が未分離かというと、そうではない。茶の湯だけが行われている場合もあり、連歌興行と同時の場合もある。むしろ、酒宴とも共存するほど、茶の湯が行われる頻度が高いというべきかもしれない。

さらに、天正十一年八月四日・同五日の記事などをみると、覚兼だ

けではなく、島津家中において茶の湯が日常的であった様子が窺える。

一、四日、如常、茶湯にて若衆達寄合、閑談共候、従夫麓へ罷下、暮的射候て慰候也、
一、五日、如常、茶湯的也、弓削甲斐介的前にて候、罷下候て終日慰候也、

とある。四日の、若衆たちが茶の湯で寄り合っている記事などは、ことに茶の湯の浸透度を窺わせてくれる。ここに登場する「茶湯」が、作法もなにもない喫茶かと思いきや、他の箇所から、きちんとした濃茶であったことが窺える。

さらに、天正十一年十月五日条には、

如常、忠棟より、内衆四本大学助当年上洛候、然者堺（和泉）にて度々茶湯之座罷出、様子共稽故仕候、就中会席之調等承由申候間、彼調儀之会たるへく候、可参之由候間参し候、奈良瓜・干瓢なと種々珎物共参候、濃・薄茶共ニ忠棟之御手前也、

とあり、薄茶・濃茶の区別があり、「稽故仕候」とあるように、きちんと稽古した茶の湯であったことが確認できる。こうした状況を総合的に判断すると、薩摩藩では、武家の間で、茶の湯がごく日常的な生活レベルにおいて、かなり浸透していたということができよう。

さらにいえば、関東でも、遠く南の薩摩でも、茶の湯は広く武家社会に浸透していたのであって、茶の湯はけっして町人の専売特許ではなかった。

武士の死生観と茶の湯

戦国時代の武士は、第一義に殺人集団としての性格をもっていた。相手を殺すことは、自分の富を増やすことを意味した。しかし、それは自分の命と引き換えの場合もあり、生と死は常に表裏一体の状況にあったといえよう。

こうした武士について、五味文彦氏は、鎌倉武士について、「武士の生き方は仏道の本質に背くものであって、それだけ自分の犯した殺生の罪業が、武士の往生を求める心を悩ますことになっていた。出家したらそれでよいというだけにはゆかず、日頃から武士たちも館の中に持仏堂を造り、往生を願っていたのである」と指摘する[11]。こうした武士の罪悪感は、極端な場合、出家・遁世へと武士を誘っていった。武士が出家するという逸話が多いのも、そうした理由であろう。

武士の死生観に仏教が関与していることは自然に理解できる。

河合正治氏は、「戦国武士は宗教的呪縛からすでに解放されており、今日あるを神仏に感謝しつつ、明日も謙虚に生き抜こうとする実践道徳的な面を強くもってきている」と述べる[12]。そして、各武家の家訓などから、いかに武士たちが仏教を信じて、強く信仰していたかを叙述している。

たとえば、「毛利家文書」には、

毎朝多分呪候、此儀者、朝日をおかミ申候て、念仏十篇つつとなえ候者、後生之儀者不及申、今生之祈禱此事たるべきよし受候つる。

とあり、毎朝、朝日を拝んで神を祈り、念仏を十回唱えて仏への尊崇を示すと同時に、わが身の後生を祈っている。こうしたことを毎日欠

かさずに行うほど、武士は神仏への信仰を深めている。それはもちろん、教義的なものではなく、生死に関する加護を祈念してのものであったろう。

「朝倉宗滴話記」には、もっとストレートに、

侍は信心肝要也、但余に過たるはおどけ者の名執すると相見へ候、其故は少々の事をも、神仏のとがめぞと思なし、心のあやかりに成ものに候、惣別之看経には現世安穏後世善所第一弓矢冥加、此外は有るまじく事に候、

最初に、武士は信心が肝心であるといい切り、「看経」の目的としては、「現世安穏後世善所第一弓矢冥加」であると明記している。現世の安穏と後世の善処を期待して看経しているわけである。

先に取り上げた、島津家の上井覚兼も、毎月、しばしば看経を行っていた。この朝倉氏の家訓と同じ現象が九州でも行われているのである。また、「多胡辰敬家訓」には、

アサ起早々ヲキテ、手水ヲシ、ウガヒヲシ、カミヲユイ、カタギヌハハカマヲキ、神仏ヲヲガミ、親主ヲヲガムベシ、親死タラバ念仏申、茶湯ナドスベシ、

とあり、茶の湯のことまで定めている。武士の日常生活の中に、手水やうがいと同じレベルで、神仏への信仰と茶の湯が位置づけられている。これもやはり、上井覚兼の生活においても見いだせることである。『上井覚兼日記』天正十一年五月六日を見ると、

諸篇如常、毘沙門堂ニ茶湯仕懸、衆中なとあまた寄合、終日慰候也、

とある。毘沙門堂に参り、そこで茶の湯を行っているのである。このあたりに、武家の茶の湯が隆盛した理由がありそうである。同書天正十一年六月十三日に、

此晩も、細工又ハ暮的なと射させ候て、見申慰候、茶湯なと、将碁なとにて、徒ニ日を暮し候、

とあり、まったく弛緩した一日を記録している。「徒ニ」というのが、いかにも武士の休暇らしい。茶の湯・将棋は「慰み」なのである。緊張する日常の中で、わずかにこうした弛緩してもよい日がぽっかりとできる。そうした日に茶の湯が行われているのである。

戦国期の武士は、他のどの時代よりもストレートに死に直面した日常を送っていた。ある意味、平和への希求が同時に戦闘につながることもあった。そうした、武士にとって、精神的なやすらぎ、または慰めといったものが日常生活を維持するためには必要であったはずである。

つまり、

日常　↓　戦闘　↓　日常　↓　戦闘　↓　日常

という繰り返しの中で生きていた。しかし、これは図式すれば単純であるが、日常（生）から戦闘（死）への肉体的・精神的移行はかんたんではない。まして、戦闘（死）で生き残り、日常（生）への帰還が適った人間が、再び戦闘（死）の場へ引き戻るには、相当強固な精神力を必要としたはずである。それを当人の武士たちが意識できていたかいなかは別問題として、生と死の精神的循環は、強大なストレスを生み出す。

そうした、武士たちの精神を癒す装置が必要だったはずである。その装置の一つが「茶の湯」だったのではなかろうか。

日常　↓　非日常（戦闘）　↓　茶の湯　↓　日常

というように、非日常空間の戦場から、日常の生活空間に戻る際に、茶の湯の空間を通過することで、非日常のできごとをいったん清算し、清める。そして精神を癒す。こうした行為が武士にはとりわけ必要であったと思われる。

それは、たんに戦場から日常への場面だけではなく、山城内での茶道具の発掘報告を見ると、戦場においても茶の湯が行われており、戦闘中という異常な状況における平常心の維持に役立っていたのかもしれない。

そして、それは戦国の世を生きる町人など多くの階層の人々にとっても、多かれ少なかれ必要であった。そうした精神的要求が、「茶の湯」に求められ、戦国時代に茶の湯が隆盛した要因ではなかろうか。と同時に、それがたんなる喫茶から、精神性・文化性を加味する要求ともなって現れ、喫茶から「茶の湯」へと昇華させた原動力ではないかと考える。

一方で、日本における喫茶の習慣は、寺院を中心とした社会で広まった。栄西の茶将来説や明恵の宇治茶創始説も、僧侶である栄西・明恵が茶の伝説の主人公となっているところに寺院と茶の結びつきの強さを感じる。

寺院の中で喫茶が広まり、武士と仏教との関係が死生観・浄土思想・厭世観などとあいまっていけば、自然に武士の中にも寺院の茶が広まることは容易であったことと思われる。その段階では、まだ、武士と茶のつながりは、喫茶にすぎなかった。そこに、戦国の強烈な非日常が加味されていった時、町人たちの寄合の茶とはことなる戦場の茶の湯として、武家の中の茶の湯が生まれていったのではないかと考える。武家の争いである戦闘が日常的になるのは、足利義政の時代の応仁・文明の乱からである。足利義政を茶の湯の祖と結びつけて考える考え方は、こうした戦闘の始まりが義政時代から始まったという発想から生じたものかもしれない。その時、同じ時代には寄合の茶の湯、寺院の茶の湯、公家の茶の湯もあり、武家の茶の湯は、それらの茶の湯との交わりの中でより文化的に変貌していったのではなかろうか。

［註］

(1) 中村修也「『松屋会記』の信憑性について」（『茶書研究』七号、二〇一八年）。
(2) 中村修也「茶の湯の名人・宗珠」（中村修也監修『よくわかる伝統文化の歴史②茶道・香道・華道と水墨画』淡交社、二〇〇六年）。
(3) 神津朝夫『千利休の「わび」とはなにか』（角川書店、二〇〇五年）。
(4) 吉村亨「一服一銭と門前の茶屋」（『淡交』五一五号、一九八九年）、中村修也「お茶は庶民の栄養ドリンク」（前掲書所収）。
(5) 角山栄『堺―海の都市文明』（PHP新書、二〇〇〇年）。
(6) 米原正義『戦国武将と茶の湯』（淡交社、一九八六年）。
(7) 『山口県史　史料篇中世一』
(8) 埼玉県立史料館企画展『埼玉の戦国時代の城』（二〇〇五年）。
(9) 史跡を活用した体験と学習の拠点形成事業実行委員会『シンポジウム埼玉県の戦国時代　検証　比企の城』（二〇〇五年）。
(10) 齋藤慎一『中世東国の領域と城館』（吉川弘文館、二〇〇二年）。
(11) 五味文彦『殺生と信仰―武士を探る』（角川選書、一九九五年）
(12) 河合正治「戦国武士の教養と宗教」（『広島大学文学部紀要』二四―二、一九六五年）。

本稿は、関剣平篇『禅茶　歴史与現実』（浙江大学出版社、二〇一一年）に収録した「戦国武士与茶道和仏教」を基として加筆訂正したものである。